

第 55 回 日本周産期・新生児医学会学術集会

P-081

長野, 2019. 07. 13-15

体外受精後の妊娠における癒着胎盤に関する予測因子の検討

松岡麻理, 北山利江 (医療法人三慧会 IVF なんばクリニック)

【目的】

癒着胎盤のリスク因子の一つとして体外受精が知られている。今回我々は体外受精で妊娠した症例に関して癒着胎盤の予測因子を抽出し検討することを目的とした。

【方法】

当院で体外受精を行い、2018年1月から12月までに周産期施設で分娩に至った453症例を非癒着胎盤群413例、癒着胎盤群40例に分類し後方視的に比較検討した。

また、当院では妊娠8週台で周産期施設へ紹介としており、当院の診療録と周産期施設からの診療情報提供書より情報を収集した。

【結果】

平均年齢は非癒着胎盤群 35.83 ± 3.87 歳、癒着胎盤群 35.70 ± 3.57 歳であり ($p=0.835$)、その他流産歴、子宮手術既往、受精方法、移植方法では有意差を認めなかった。子宮動脈塞栓術既往 ($p=0.021$)、喫煙歴 ($p=0.037$)、妊娠8週までに絨毛膜下血腫 ($p=0.021$) や不正性器出血 ($p<0.001$) を認めた症例で有意差を認めた。多変量解析でも子宮動脈塞栓術既往、喫煙歴、妊娠8週までの不正出血で有意差を認めた。

また、移植前内膜厚では有意差を認めなかったが、内膜8mm未満の症例でハードチューブを用いて移植した2症例はともに癒着胎盤を来した。

【結論】

本検討より、癒着胎盤予測として病歴や嗜好歴、妊娠後経過に関する情報を的確に周産期施設へ伝えることが重要と考えられた。また、内膜厚や移植方法を含め体外受精における癒着胎盤増加の因子に関してはさらなる検討が必要である。